台北孔子廟について

――台北孔子廟と日本との関連に於ての素描――

小林和彦

一　序

東アジアの思想について考えるに当って、儒教について一定の見識を持つことは不可欠なことである。その際、どのような視点から論究するか、ということが必要となろう。

勿論、東アジアに於ける文化としての儒教に対する基本的な見解が必要であるが、[1]各地域に於ける儒教の展開ということを考えると、儒教はその共通面、及び連続性を有しつつも、多様な形態が存在し、ある意味でその点に儒教研究の意義が存在するのではないか、[2]と考えられる。

この問題について論述するにあたり、孔子廟の位置づけは重要なものがあり、儒教が発祥した中国（以下、大陸）の明代にはすでに約一五〇〇に達し、[3]平成一六年（二〇〇四）現在主なものだけでも約二六〇ヵ所存在する。[4]

また台湾（本稿に於ては清末を視野に入れているため、それ以降の展開を指すものとする）には、昭和六〇年（一九八五）に於て台東、花蓮の二県を除いて各県に最少一廟ずつの孔子廟があり、[5]平成一四年に登記されているものだ

けでも二三ヵ所の孔子廟が存在し、[6]確認できるものだけでも一九廟あることを考えると、[7]孔子廟のあり方を通しての台湾於ける儒教のあり方、またそれが日本との交流に当って、その意味づけについて論述することは、儒教のあり方を考える上で、一つの姿を体現したもの、と言えよう。

以上の問題設定の下に、筆者は平成元年（一九八九）に台北孔子廟を訪れた。その後、平成一八年（民国九五年）から二〇年にかけて修理が行われるため、平成二二年五月に本格的な調査を行ったが、孔子廟の専著としては黄得時著『臺灣的孔廟』（台湾省政府新聞處　民国七〇年〔一九八一〕）が、日本に於ける台湾孔子廟の専著としては、寺田剛訳文並註『在台湾孔子廟碑文集成』（野人会　昭和五八年〔一九八三〕）、及び同氏著『臺灣の孔子廟の研究』（野人会　昭和六〇年〔一九八五〕）を知り得るのみであった。

その後、中華民国（以下の年号表記、民国）一〇〇年（二〇一一）を記念して出版された施淑梨主編『聖之時――台北市孔廟的蛻變與傳承』（台北市孔廟管理委員会）が、民国一〇三年に水口拓寿による日文訳が出版されていること、平成二三年（二〇一一）一〇月に陳昭英による本格的な台湾孔子廟研究と言うべき『台湾儒学』（国立台湾大学）が平成二八年一二月に松原舞によって翻訳出版されていること、[8]民国九八年（二〇〇九）から一〇〇年にかけて「台北孔子廟歴史エリア観光再生計画」の下に儒教文化への雰囲気の観光スポットとして開発したため、[9]寺田による調査・論述について再考が必要となり、改めて平成三〇年（二〇一八）一二月に台北市孔廟の再調査を行ない、その意味づけの必要を考えるに至った。

今回台北孔子廟と日本との関係に於ての儒教のあり方についての起稿に至った所以である。

記述に当たり紙数の関係上、二例を除き引用文は省略し、注記に止めた。従って本稿は要旨的なものとなったこと、

諒とせられたい。素描と称したのは、そのためである。尚、年号表記については当該国を優先し、その後に関係年号を付した。

二　台北孔子廟の沿革
――建廟、取り壊し、再建まで――

台北孔子廟の専論としては、古くは林昭南「臺北市孔廟」（『台湾文献』直字第七九期、台北市文献委員会　民国七八年〔一九八九〕）があるが、専著としては翌年の台北市孔廟管理委員会編『臺北市孔廟簡介』（同委員会）更に李乾朗著『台北市孔廟』（同上委員会　民国八五年〔一九九六〕）等があり、その概要を知ることができるが、先述の様にその後改修を経ている。

孔廟研究に於て石碑は重要な位置を占めており、[10] 廟内に建碑されている「宏揚聖道維護孔廟碑記」によれば、民国紀元前三三年、つまり、光緒五年（一八七九）より同碑の建碑年の民国六一年（一九七二）まで、約一〇〇年経過していることや、[11] 更に創建臺北孔子廟碑記によれば光緒八年までを第一期、その後民国二八年（一九三九）までを第二期としていることが知られるため、[12] それに従い、蔣介石の渡台が行われた民国三八年（一九四九）以後の歩みを第三期として第四章に於て論述することにしたい。

台北孔子廟の建廟は清朝の光緒元年（一八七五）、台湾北部に台北府が置かれ、光緒五年に街づくりが始まり、陳星聚知府と夏献編・台湾兵備に府の監督の下、街の南門の内側に孔子廟が設置されたことによってである。次図Ｉは、その設計図である。これによると、萬仞宮牆、儀門（大成門）、大成殿、崇聖祠を備えた本格的なものであったこと、

これを曲阜孔子廟（巻末参考付図）と比較すると、異なる点は、西軸線に武廟が存在すること、東軸線上に明倫堂があること、台北孔子廟が官廟として建廟されたため、家廟がないことが窺える（巻末資料参照）。

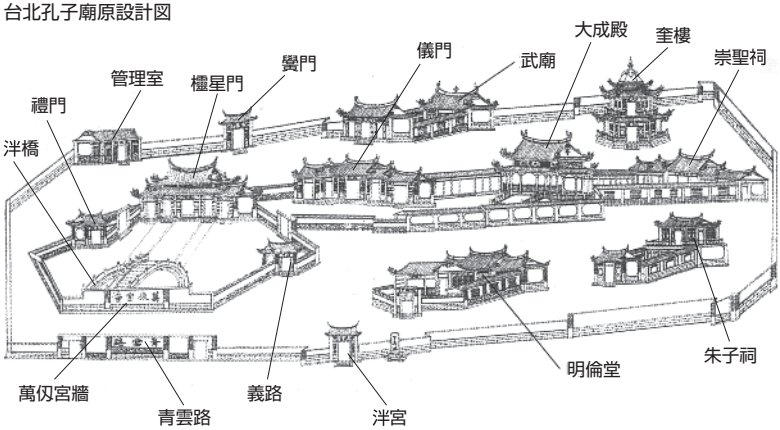
建廟の経緯は最初に光緒七年（一八八一）に、孔子廟の中軸線の根幹をなす儀門、大成殿、崇聖祠が完成し、翌年には続いて櫺星門、黌門、義路、泮池、萬仞宮牆を増設し、続いて、光緒一〇年（一八八四）までに明倫堂、朱子祠、奎楼閣等のすべての建築が完成した。[13]

光緒は三四年を数えており、四年間で廟としての体裁を整えたのは、比較的短期間であった、と言えよう。

その理由として、孔子祭祀（釈奠）が光緒三二年（一九〇六）に中祀から大祀に昇格されている。これは、西洋インパクトによる康有為に見る様に、西洋に対抗して孔子を開祖とした孔子教ともいうべき中国文化への重視[14]が、その背後にあったため、と考えられる。[15]

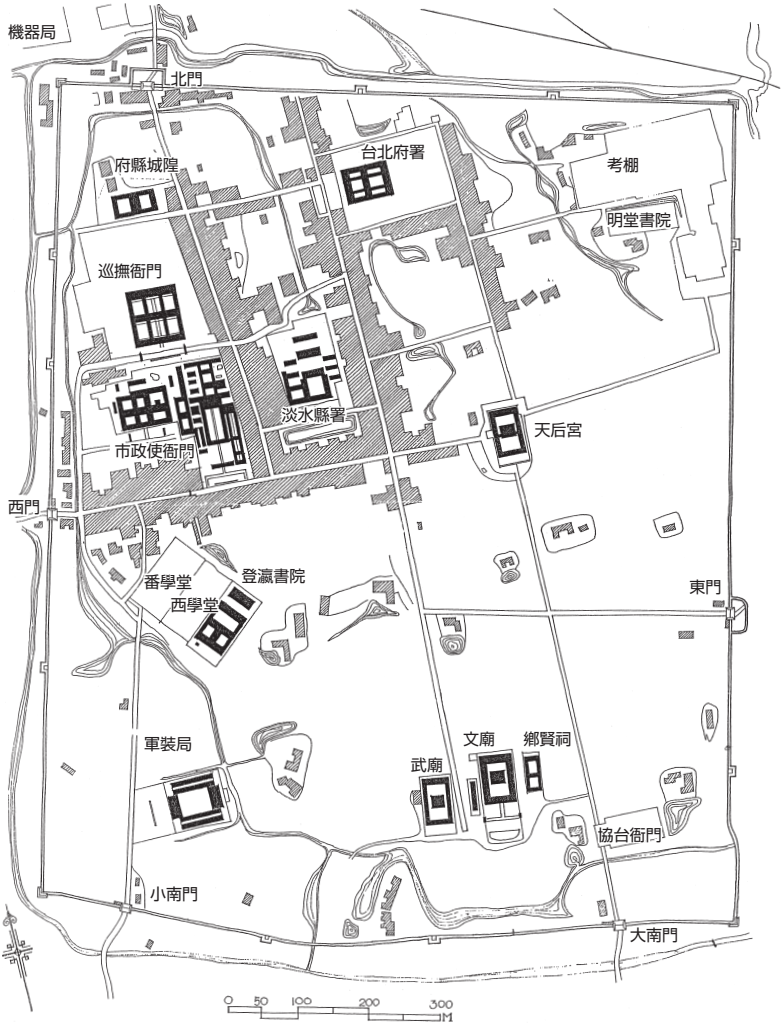
次図（図Ⅱ）は光緒二四年（一八九八）の台北城の様子である。

台北孔子廟原設計図



図Ⅰ　榮峰「台北孔子廟事略」（『台北文物』第２巻第２期　台北文献委員会　中華民国42年〔1953〕）

李乾朗著『台灣建築史』民国 68 年　雄獅図書股份有限公司



光緒 24 年（1898）之壹北城内

図Ⅱ　李乾朗著『台灣建築史』（雄獅図書股份有限公司　民国 68 年〔1979〕）

これによると、孔子廟は大南門の北へ約西北へ二五〇メートルの位置にあり、大南門から小南門にかけて、川があるところよりすると、伝統的な南面の形式を取り、風水を考慮して建廟されていることが知られる。

しかし、孔子廟原設計図（図Ⅰ）と比較すると、武廟は廟内ではなく道路を挟んで（文武街、現・重慶南路）、西側に建廟されている。これは原設計図に拠ったと考えられるが、孔子廟に伴って武廟が建廟されることは、大陸、及び日本には見られないことである。

台北孔子廟横に建廟されたのは、清朝と関羽との関係は深いものがあり、清末の威豊三年（一八五三）には、群祀から孔子と同格の中祀に昇格され、文廟の孔子と比肩することになったことが原因と考えられる。[16]

尚、現在はその跡地の法務部前面の重慶南路一段に、台座を入れて約一九・八メートル（碑文は約一八・八メートル）の中華民国七二年（一九八三）四月建立の「清臺北府武廟旧址」碑が建碑されている。

これによって、武廟は光緒一三年（一八八七）に文廟と相対して建てられ、その間の道を通路としたため、文武街（現・重慶南路）と呼ばれた。その後光緒三四年（一九〇八）に至り廃され、今日に至っていることが知られる。

また、東側に郷賢祠が建てられていることは注目に値する（その意味については、後述）。

台湾は清佛戦争の光緒一一年（一八八五）福建省から独立して台湾省として置かれているので、台北孔子廟の建廟は実質的に清朝時代と考えて良い、と考えられる。

以上を第一期としたい（以下、行論の関係上、旧廟と表記する）。

次に台北孔子廟が転期としての第二期を迎えるのは、光緒二〇年（一八九四）の日清戦争によって、翌年台湾が日本の領有に帰し、取り壊され、再建に至るまでである。

再建の経緯については、前掲・台北孔子廟内の「創建台北孔子廟記」に記されているので、それを参照して記述する。

戦争中の光緒二〇年（明治二七年・一八九四）日本軍は台湾を占拠し、孔廟は一時衛戍医院として使用されており、[17] 孔子の神像や位牌は廃され、廟は光緒三三年（一九〇七）に至って取り壊された。そして、廟の跡地の東側北部は台北第一女子学校（現、台北市立第一高級中学）として、南の方は台北第一師範学校（現、台北教育大学）として、[18] そして武廟の跡地は地方法院（現、法務部）として利用された。

孔子廟は植民地化された台湾の人達に自分たちの文化を守る地点という意識があり、[19] 民国一四年（大正一四年・一九二五）に台北に孔子廟が無いのを遺憾に思う風潮が高まり、[20] 民国一四年（大正一四年・一九二五）に陳培根、黄賛鈞等集まって協議し、陳培根は大龍峒（台北駅北へ約二五〇メートル）私有地二〇〇〇坪余りを提供し、建廟を提案した。そして黄賛鈞等は重建協議会を開き、辜顕栄等九名を募金の発起人とした。

同年三月、辜顕榮も土地一〇〇〇余坪余りを提供し、また田地一〇〇〇坪余りを購入した。同年八月に鄭孝廉、伯嶼を招いて吉位方向を定め民国一八年（昭和四年・一九二九）八月、両無・大成殿を竣工、民国四四年（昭和三〇年・一九五五）明倫堂の着工、翌年の完成を以て、武廟、朱子祠等を除いて、ほぼ原設計図（図Ⅰ）に基づいた設計図の通り、中軸線の復建によって孔子廟の主要建造物を備えた孔子廟としての体裁を整えた。

次章の図Ⅲは、平成三〇年（民国一〇七年・二〇一八）の現在の孔子廟図である。

これによってその概要を知ることができ、以上、孔廟取り壊しより、再建に至るまでを第二期としたい。その後の今日までの歩み、及び意義づけ、という問題に関係しており、それについては第四章にて論述したい。

三　台北孔子廟の構成

次図Ⅲは、再建された孔子廟の平面図である。

廟は横幅約一〇三、八メートル、縦幅約一四〇メートル、建地坪約四三〇〇坪の広大なものであり[21]、第四院落より成っている。

曲阜孔子廟と比較してみると、曲阜孔子廟の萬仞宮牆から　櫺星門を含んで奎文閣までを台北孔子廟の第一院落とし、曲阜孔子廟の奎文閣から大成殿までが台北孔子廟の第二院落、儀門から大成殿までを第三院落、第四院落は大成殿から寢殿（台北孔子廟では崇聖祠）まで、となっている。これによって曲阜孔子廟の構成を基準にしていることが知られる（巻末資料参照）。

次に台北孔子廟の第一院落から、第四院落までについて記述することにしたい[22]。

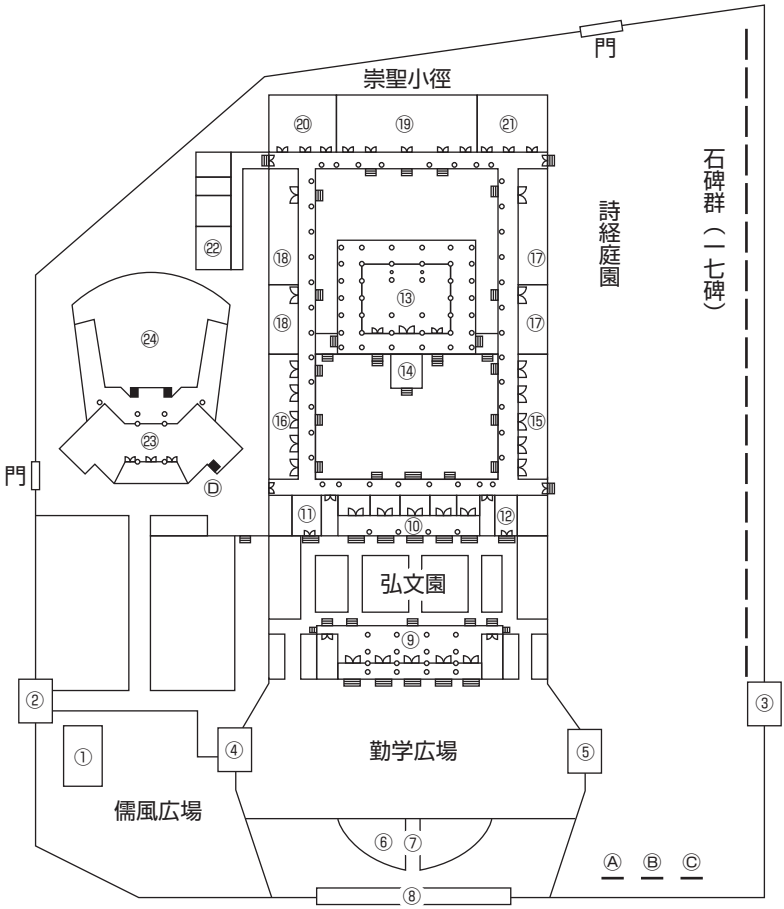
第一院落は孔子廟の前庭にあたり、勤学広場と名づけられている[23]ので、学に入る最初の空間と位置づけることができる。

台北孔子廟の南側の外壁は孔徳成揮筆の萬仞宮牆となっているが、台中孔子廟に見る様に多くは独立したものであり、台北孔子廟が他の孔子廟と異なった点と考えられる。

正門が設けられていない理由は状元のみが正門を通ることができるが、台北に於ては状元が出なかったことによっている。

萬仞宮牆の内側に泮池と泮橋がある。泮橋が太鼓橋となっているのは、図Ⅰを踏襲してのことと思われ、欄干には

図Ⅲ　台北孔子廟平面図



①案内所	⑧萬仞宮牆	⑮東廡	㉒厠所
②櫺門	⑨欞星門	⑯西廡	㉓台北孔廟管理委員会
③泮宮	⑩儀門（大成門）	⑰東廡	㉔明倫堂
④禮門	⑪休憩室	⑱西廡	Ⓐ創建台北孔子廟碑記
⑤義路	⑫弘道祠	⑲崇聖祠	Ⓑ創建臺北市孔子廟明倫堂記
⑥泮池	⑬大成殿	⑳多媒體放映室（西庫）	Ⓒ宏揚聖道維護孔子廟碑記
⑦泮橋	⑭月台（露台）	㉑文物展示室（東庫）	Ⓓ重修臺北市孔廟明倫堂記

竹の節を模して節義を象徴し、その頭部は筆の形であるのは、文運を表している。泮池は孔子廟に池があったことによるものであり、旧廟の南側に川があったのも、これに拠ったと考えられ、孔子廟が孔子の遺徳を偲び[24]、基本的に学問を伝える場であったことを示すものである。

学との関係で言うと、廟の東側に民家が密接しているため、他の孔子廟と異なり、西側の門が黌門となっている。門の入り口の左側の壁面に、民国六二年（一九七三）楊寶發の筆になる大学首章、反対側には中庸首章の碑文（縦一二三センチ、横四二センチ）が埋め込まれている。

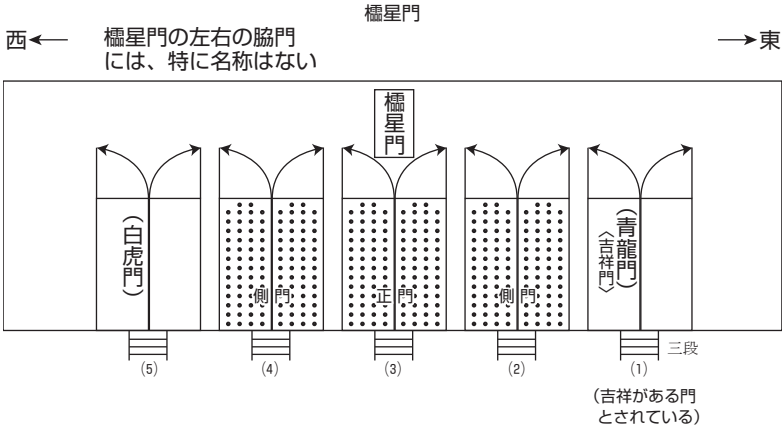
朱子学に於て『大学』は読書のはじめ、『中庸』はその完成を意味するもので、学門を入ると反対の礼門へと続く通路に出る。これは礼と義によって仁、義、礼、智、信という五常の徳目をなしている。そうすると、黌門は正に学に入るという性格を有しており、黌門、禮門、義路、泮宮はそれらを象徴する構成になっている、と言えよう。

次の第二院落との間に櫺星門がある。そして、その院庭に『礼記』大同篇の「大道之行、天下為公」という文が書かれている。これは孫文の三民主義が大同思想に基づき、台湾統治のための儒学思想と関係していることを考えると[25]、意義深いものがあることが感じられる（詳細は次章に於て論述）。

この院落は『論語』衛霊公篇の「人能弘道」に拠って、弘文圏と名づけられており、第一院落に対して、本格的な学問とすることを示すもの、と言えよう。

櫺星門は曲阜孔子廟に見る様に、宋の仁宗の天聖六年（一〇二八）に設けられ、以後孔子廟の最初の門となった。その意味は最初にあらわれる星として、孔子の聖を例えたものであろう。

次図は台北孔子廟における櫺星門である。



五つの門より成っており、その前には三段の階段が付設されている。説明の関係上、門に東側から西に向かって、(1)から(5)までの番号を付す。

主要門は中央の(3)で、その左右には一名石球といい、太鼓のような螺施曲線の装飾が施され、前面に包巾が彫られている抱鼓石が置かれている。この門は釈奠の時にのみ開かれ、送神の後は閉じられる。

門の左右には龍の身体が八角形の柱を二回りしており、多くの人物の造形が彫られている龍柱が建っている。その左右に二門ずつが設けられている。

(2)・(4)は脇門となっており、ともに門釘が一〇八個ずつある。注目すべきことは(1)と(5)の関係である。通常は(1)の青龍門から入り、(5)の白虎門より出ることになっている。この意味すべきことは、台北孔子廟の萬仞宮牆の裏面に騏驎が描かれていることである。

騏驎が描かれた理由としては、孔子出生の折、一頭の騏驎が玉書をくわえてあらわれたと伝えられていることや、『春秋左伝』哀公一四年の獲驎の記事によった[26]、と思われる。

騏驎には四本の足があり、鈴、印鑑、瓢箪、如意を掴んでおり、そ

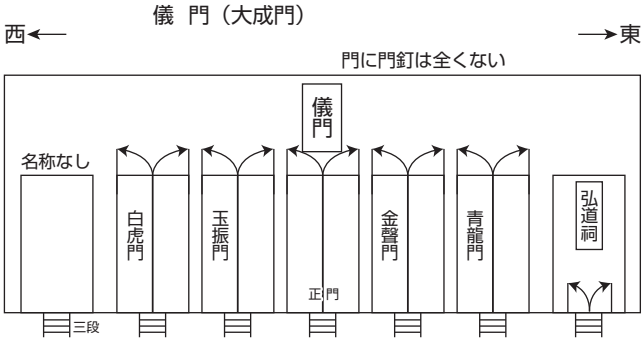
れぞれ教養、文運、開運出世、万事如意（順調）を意味している。[27] そして、騏驎が孔子廟の南面壁に描かれていることを考えると中央に騏驎、東に青龍、西に白虎が配されているのは、『礼記』曲礼上の記述と一致している。[28]

そのように考えると、第二院落は「天下為公」の言にも窺えるが、孔子の道を学ぶという意味に於て、第一院落より東に直接的な意味をなす院落と考えることができる。

次は孔子廟と直接関係を持っている院庭、つまり儀門及び大成殿である。

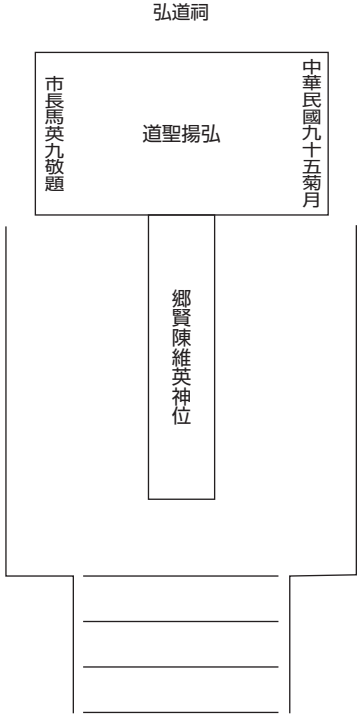
上図は儀門である。曲阜孔子廟では櫺星門の左右にあるが、下馬碑はなく、正門の上に扁額が掛けられているのは櫺星門と同じである。

門の構成に於て櫺星門と異なるのは、門針がなく東の門が金聲門、西側の門が玉振門と呼ばれている。これは曲阜孔子廟に於て萬仞宮墻の金声・玉振門が『孟子』万章下篇の「孔子、之を集めて大成すと謂う。集めて大成すとは、金聲にして玉、之を振するなり（孔子之謂集大成。集大成也者、金聲而玉振之也）」に拠ったものと思われる。つまり儀門は曲阜孔子廟の大成門の役割を果たしているが知られる。



注目すべきことは、東西に耳門が設けられていることである。

平成三〇年一二月の調査時では西側の耳門の内部は見学者の休息室として使用されていたが、平成二二年五月の調



査時では服務室となっており、廟及び釈奠に関するパンフレットが置かれていた。前掲の寺田著『台湾の孔子廟の研究』によると氏の調査時に於ては李初吉老人が管理室として使用していた様なので[29]、重要な位置を占めていた、と考えられる。現在の廟の管理室は黌門の右手に移され、案内処となっている。筆者の調査の過程よりすると、民国九九年（平成二一年・二〇一〇）の第二次孔廟修理の折、移転された、と推測される。

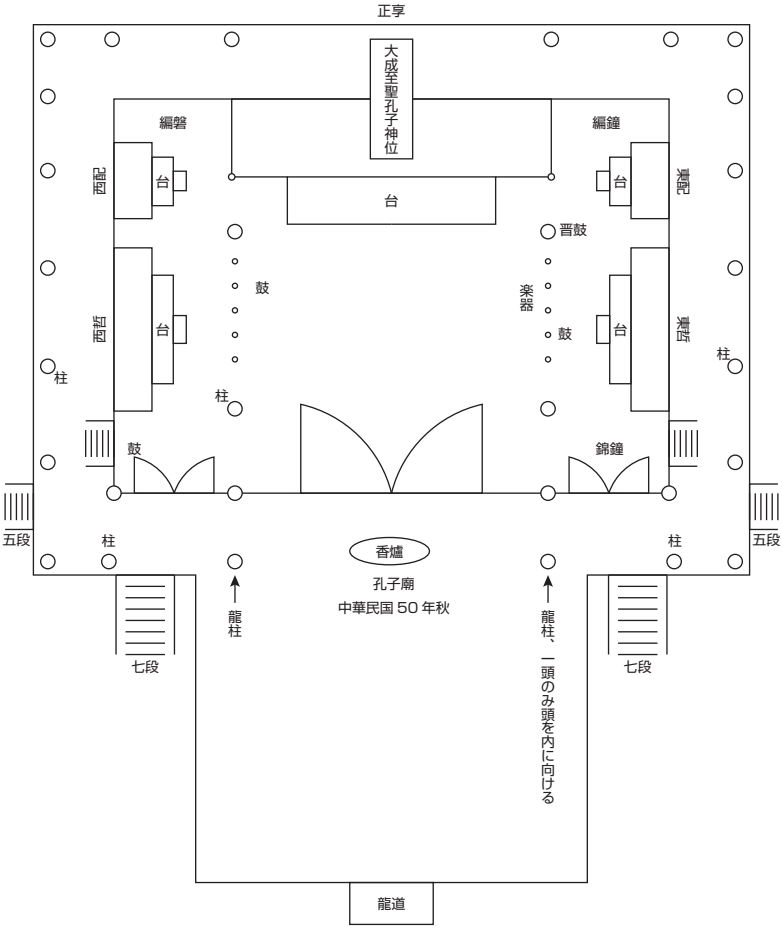
東側の耳門は弘道祠となっている。弘道とは前述の『論語』衛霊公篇からの章文の命名によるもので、民国九四年（二〇〇五）に台北市政府によって設けられ、翌年、台北市孔廟管理委員会の荘永明委員、陳福浜（当時、輔仁大学文学院長）らが、地元大龍峒出身で、地元の教育に貢献した陳維英[30]を入祀したものである。

これは旧廟の東側に郷賢祠が独立して設置されていたが、再建された新廟にて、この様な形で入祀されたものであろう。郷土に於ける賢人を孔子廟に従祀することは曲阜孔子廟、北京孔子廟には見られず、台湾の孔子廟の特徴と考えられる。

次は大成殿のある第三院落である。次図は大成殿図である。

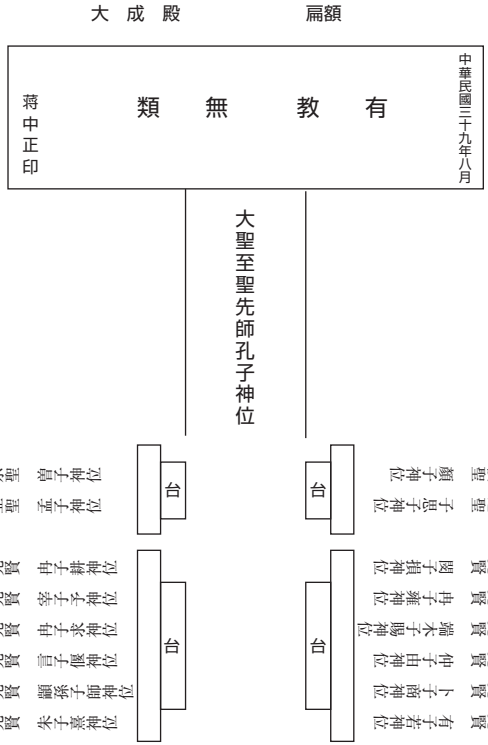
大成殿の大きさは露台を入れて、前面横幅は二二・七メートル、縦幅は一九・七メートル、露台は横幅八・六メー

大成殿図



トル、横幅八・六メートルで釈奠では六佾の舞が行われ、孔子廟と書かれた鼎が置かれている。その前には一頭の龍が彫られた龍道となっている。

これは通常の儀式に於ては左右の七段の階段によって行われている。通常の昇段は走廊左右五段の階段によって行われている。走廊には孔子廟正面扉の左右の龍柱を含めて、丸柱が廟後方の六本、廟前の左右一〇本を含め



て、二二本より成っている。大成殿内の内部の四配一二哲は、上図の様である。

これは曲阜孔子廟と同一であり[31]、台北孔子廟は他の孔子廟と同様、孔子廟としての基本に則っている、と言えよう。

旧廟と異なるのは孔子像であったが[32]、現在は木主であることや、木主の上の扁額が平成二二年（二〇一〇）の調査時には、馬英九の「道貫德明」（民国九七年九月）と民国三九年（一九五〇）八月の蔣中正（介石）「有教無類」の二額であったが、一額となっていることである（後述）。

次は両廡についてである。

東廡は先賢四〇位、先儒三七位であり、先儒〇〇神位として、公孫僑から四〇位邵雍までが続いて先儒は先賢と同様に先儒〇〇神位として、公羊高から方孝孺までの三七名が従祀されている。同一形式にて西廡には三九位の先賢が先儒については穀梁赤から李恭までの三七位が従祀されている。台南孔子廟に於ては、東廡、先賢四一位、先儒三九位、西廡、先賢四〇位、先儒三八位となっており[33]、若干の差異が見られるが、従祀という意味に於ては、ほぼ同一で

あることが知られる。

次に崇聖祠に移る。

戸扉は五つある。全て木主にて西側には先賢として曾點、孟孫激が、先儒として張廸、朱松が、東側は同じく先賢として顔無繇、孔孟皮、孔鯉、先儒として周輔成、程珦、蔡元定が従祀されている。

崇聖祠は曲阜孔子廟では廟の東側にあるが、台南孔子廟では大成殿の後方に位置しており、台南孔子廟の体裁を踏襲したもの、と考えられる。そしてこの空間を崇聖小徑として、第一院落の勤学広場として学に勤む、所謂入学の場としているのに対し、学を完成した場として対応している。

平成二九年の調査での大きな変化は『論語』季氏篇の陳亢問於伯魚章の庭訓の教えにちなんで、廟の東側の広場を詩経庭園と名づけて詩経、孟子、大学、中庸、礼記、尚書、周易、論語の一七基に及ぶ石碑が建碑されたことである。この広場は市民に開放されて憩いの場として使用されており、孔子の教えを市民に理解させる、という面が窺われる。これはかって黌門を入ってすぐの南側に建碑されていた創建台北孔子廟碑記、創建台北市孔子廟明倫堂記、宏揚聖道維護孔子廟碑記が移動されており、これによって台北孔子廟の建廟、並びに再建の経緯、意義を知り得る様になっていることである。

最後に台北孔子廟の特徴として、萬仞宮牆裏面の騏驎図、櫺星門の青龍門、白虎門に見る様に吉祥、天文を視野に入れ、かつ櫺星門、儀門、大成殿に儒学に関することをベトナムの陶器によって呈示していることであり、[34]これは特筆に値すると言えよう。

四　台湾における台北孔子廟の位置づけ
――中華文化復興運動に関連して――

本項で論述するのは、一九一二年に成立した中華民国（以下の国名、民国）より、日本との関係に於て現在の台北孔子廟に至る経緯である。それに当って注目すべきことは、台北孔子廟にて行なわれている民国九七年（二〇〇八）の釈奠の祭文に「三民主義　重視海疆　生民安楽　両岸歸心　國父（孫文）遺教　博愛精神」として、孫文の三民主義が重視されていることである。

周知の様に三民主義は民国以降の中国史と密接に関わっているが、本稿に於ける台北孔子廟と台湾史の関係は、大まかに次の三つの異なる時期、つまり(1)古典的な世界としての清朝の時期、(2)日本による植民地時代、そして(3)第二次世界大戦終了時から現在に至る時期である。[35]

これを台北孔子廟の歩みに当て嵌めると、建廟期は(1)に、取り壊しと再建の時期は(2)に属し、現在のあり方は(3)の時期の蔣介石の渡台以降になる、と思われる。従って、現在の台湾に於ける台北孔子廟の位置づけを考えるに当って、蔣介石の儒教に対する施策が重要となるが、それに当って清末及び一九一二年の民国以降の蔣介石に至るまでの儒教のあり方について、論述することにしたい。

民国元年（一九一二）一月一日、孫文の臨時大總統の就任式が行なわれ、中華民国が成立した。しかし、それは袁世凱の権力、及び独立した各省の権力による大まかな総合体であり、[36]そのまま西洋の標榜する近代化への道を歩んだわけではなかった。勿論、西洋的な思惟は存在したが、清末の光緒二八年（一九〇二）に欽定学堂章程が、その二年

後に発布された奏定学堂章程は経書学習は国民に儒教道徳を注入する重要な位置を占めており[37]、一方に於て中国思想界では孔子の教えを宗教としてとらえ民国の国教にせよ、という運動のあり方[38]、儒教勢力が存在し、同年一〇月陳煥章によって設立された孔教会の創立に見える様に、伝統的な価値観が存在した[39]。同会は限界があったにせよ、儒教経典の読経を行ない、光緒三二年（一九〇六）一一月に従来の中祀から大祀への流れを汲む[40]祭祀の実施という方向で、民衆の教化を目指した[41]。

民国二年（一九一三）に袁世凱は孔子を尊崇する文を発布し[42]、更に翌年一月、政治会議に於て祀孔典礼（以下、釈奠）の実施に関する諮謀案を提出し、決定をみた。そして同年九月、文武百官を引いて北京孔子廟に於て式典を行ない[43]、翌年に帝政を発布した。そしてその教育指標として、中国の古典教育としての四書五経の学習を課した[44]。

民国八年（一九一九年）は五四運動に見える様に反儒教運動の魁であったが、しかし、同時にこの年は北洋政府によって、曲阜孔子廟に顔元（清・天聰九年〔一六三五〕――康熙四三年〔一七〇三〕）と李塨（清・順治一六年〔一六五九〕――乾隆二年〔一七三七〕）が従祀された年であった[45]。

勿論、こうした風潮に対して魯迅の様に反撥が存在したが[46]、民国二二年（一九三三）八月二七日、国民政府と中国国民党（以下、国民党）は首都・南京に於て第一回の釈奠（祀孔典礼）を挙げ、汪兆銘以下、数百名が全国一斉に式を挙げた[47]。孫文によって結党された中國国民党（以下、国民党）内部には、三民主義を中国共産党が依拠するマルクス主義の理論と同時に、孫文は六歳からの二年間、四書五経を選読しており、儒教の言葉を三民主義に於て肯定的に使っている様に、伝統思想を継承した面が存在した。それは孫文の死後すぐに出版され、孫文の重要な幹部であった戴季陶の著『孫文主義の哲学的基礎』（民国一四年〔一九二五〕）[48]に見る様に[49]、中国の伝統思想――それは儒家思想で

あったが――を継承したものであった。

蔣介石はその著『中国の命運』に於て「我等は知っている。中国道徳の教條が忠・孝・仁愛・和平であり、立国の網維が礼・義・廉・耻（恥）であることを。（中略）五千年の治亀興亡を積んで以て、わが民族の廉を明らかにして耻を知り、辱を忍び重きを負ふの徳性を成就したのである」[50]として、中国を伝統的な価値の上に立ち、儒教の正統的思想を継承したものとして[51]、受け継いだ、そして民国一三年（一九二四）に広東郊外に設けられた黄埔軍官学校（国民党の軍士官養成学校）[52]の校長を務め、民国一六年に上海にて孫文の未亡人の妹・宋美齢と結婚して孫文の義弟となることで、孫文の正統的な後継者である感を強くした[53]。

そして、民国三八年（一九四九）一〇月一日に毛沢東による中華人民共和国（以下、大陸）の成立が行なわれた年の一二月一〇日渡台し、台湾に出現する国家は自らの国民党の是とする「三民主義」を目指した[54]。

台北へ移住した後も大陸時代よりの中国文化に対する方針を受け継ぎ、儒家思想の復興による国民党式国民化を目指した。そして民国五五年（一九六六）一一月一二日の孫文の誕生日の三ヵ月前に発動された大陸の文化大革命に抗する形で民国二四年（一九三五）に蔣介石によって大成至聖先師奉祀官に任命され、同年の結婚時に窺える様に[55]、中華文化復興運動の要として以前から交流のあった孔子直系七七代子孫の孔徳成を渡台させた[56]。

中華文化復興運動は台湾が日本的支配から脱却し、中華文化、特に儒教文化の復興という主旨の下に行なわれ、台湾における孔子廟との関係で記述すると、積極的な支援が行なわれた。台北孔子廟はもとより、台中市・彰化県等の孔子廟の建設・改修に加えて高雄市孔子廟が民国六三年（一九七四）に建廟が開始され、翌年に落成した[57]。

台北孔子廟との関係では大陸での批林批孔運動で孔子批判の標語となった「有教無類」[58]の扁額が蔣介石によって掲

げられ、続いて民国四五年（一九五六）の明倫堂完成時の植樹節の折に龍柏の木が植えられた。[59] 民国四九年（二〇〇六）九月、台北市政府によって実施された孔子廟儀門東側の弘道祠（前出）への地元の名士である陳維英（清・嘉慶一六年〔一八一一〕～同治六年〔一八六九〕）の従祀もその一環であった。[60] 更に民国九七年（二〇〇八）には、旧暦の三月八日（旧暦仲春にあたる上曜日）から民国一〇五年（二〇一六）の間、九年間に渡って春節祭祀（春季釈奠）が実施された。[61]

そして、蔣介石は中華文化復興運動を倫理・民生・科学の復興と定め、孫文が唱えた三民主義は孫文の後継者である自分によってのみ継承可能であり、中華民族の伝統に基づく民族的正統性とした。[62]

民国五七年（一九六八）に台北孔子廟が民営から市政府の孔子廟となり台北市孔廟と称したのは、中華文化復興運動の中で自然な趨勢であった。従って、台北孔子廟の歴史を第二章の第一期の官廟から、第二期の台湾における私廟、更に中華文化復興運動による官廟という経過を曲阜孔子廟と比較してみると、魯の哀公の建廟による私廟――孔子の遺品を置いた簡素なものであった――から、漢代以降は官廟として発展し今日に至ったことは、蔣介石の渡台以降の施策を考えると、異なった経緯をたどっている、ということができよう。

蔣介石は民国三九年（一九五〇）に三民主義の民生主義に育・楽を補述した『両篇補述』を著したが、それは一〇年代（一九五〇）の文化政策の指針とされ、なかでも最大の意義は「反共文芸」の推進にあり、魯迅批判で行なわれた。そして、民国五二年（一九六三）中国伝統文化を重視した中国文化学院（民国六九年〔一九八〇〕に中国文化大学に昇格）が開校され、[63] 三民主義の研究が行なわれた。その後、民国五四年（一九六五）に陳誠が死亡したため、蔣経国が蔣介石に代って総統の座に就いた。[64]

蔣経国は台湾の本土化、つまり大陸との一体化を進めると同時に、文化面に於ける「本土化」を目指し、自政権での人材抜擢、登用を主軸とした文化政策を目指したが[65]、父親・蔣介石から蔣家の息子としての伝統的な中国古典哲学を踏えた孫文学説についての細かな指導を受けていた[66]。

蔣介石・経国の両者による台湾での三民主義、古典文化への態度を通しての中国文化復興運動は、蔣介石が大陸での民国二三年（一九三四）に「新生活運動要義」という演説を行ない「礼（折り目正しい態度）・義（純粋に正統な行為）・廉（はっきりした弁別）・恥（切実なる覚悟）」を基本的な精神とし、三民主義によって正当化しようとした新生活運動を引き続き台湾に於ても実施しようとしたもの、と考えられ[67]、大陸時代の新生活の完成版といえるものであり、それを示すものとして民国五七年（一九六八）に正式施工された『国民生活須知』[68]の制定、推進に見ることができ、それは言動や振る舞い等細部に至るまでの行動規範の改良を目的としたマニュアルであり[69]、精神的には国民道徳を目指したものであった。

そして、同年「大成至聖先師孔子誕辰紀念辨法」と題する法規が公布、施行され、孔子誕生日（新暦九月二八日）に中央政府及び地方政府での孔子廟の所在地に於ては、釈奠を現地の行政首長が主宰することが義務化された[70]。

民国七七年（一九八八）一月の蔣経国の死によって李登輝が第七代総統に就任した。李は蔣介石・経国と異なって台湾生まれであり、蔣介石・経国同様に孫文の三民主義を引き継ぎ[71]、民国八五年（一九九六）蔣政権の国家観を正し、大陸とは別の台湾の独自性を強調した『認識臺灣』を刊行して国民中学校の国語教科書とし[72]、台湾独自のアイデンティティを目指した。そういう意味では、蔣介石に比して新たな一歩、つまり中華文化復興運動が上からの運動という性格を脱却し、民衆からの台湾ナショナリズムによる本土化、台湾化を進めた[73]と言えよう。

李登輝は昭和一八年（一九四三）に京都帝国大学に入学している様に親日家として知られ、日本の武士道を道徳的規範とし、[74]儒教の根源を「善悪を定めた道徳」とした。[75]それは、蔣介石が日本が強国となった民族精神としての拠り所に見習うべきとし、それは武士道にある、[76]とした。これは李と目的とする所は異なるが、武士道に着目したという点に於ては共通性を有するもの、と言えよう。

民国八九年（二〇〇〇）三月、選挙に於て陳水扁が総統に当選し、国民党から民主進歩党への政権交代が行なわれたが、民国九七年（二〇〇八）の選挙にて馬英九は八年ぶりに国民党に政権を取り戻した。そして、同年、台南孔子廟に「聖徳化育」の扁額を挙げ、更に台北孔子廟の修理を行なった。その際、現在は取り外されているが、馬によって廟内に「道貫徳明」という扁額が挙げられ、孔子廟の改修を経てほぼ今日の台北孔子廟の体裁を整えるに至った。そして、台北孔子廟ではこれに呼応して、釈奠を大祀の等級で儀礼を行ない、八佾の舞が奉納され、同年より春節祭祀（春季釈奠）が行なわれた。[77]更に翌年、馬は台南で開催された「台湾首学」である台南孔子廟の釈奠儀式にも参列した。[78]

これは蔣介石・経国、李登輝と異なって、孔氏家の伝統に則った儒教の正統性を示した歩みであるが、儒教の台湾に於ける意義として適合する社会的倫理のあり方と考えられる。

五　結語に代えて

――孔徳成と廣池学園及び論語普及会を通じて――

本稿のしめくくりとして、台北孔子廟の建廟の経緯を考えると、大陸との関係を考察しなければならないが、台北孔子廟の取り壊し（第二章の第二期）後、日本との交流を通しての台北孔子廟の果たした役割りを論述し、その意義を解明したい、と思う。

旧廟は日本によって取り壊されたが、それを惜む有志は、――それは当時、清末から続いていた書房（私塾）での漢文教育が、台湾に於て行なわれていたことが、その基盤にあったことによるもの、と考えられる――跡地の日本語学校の校内に五坪程の小堂を建て、小規模な釈奠を行なっており、民国六年（一九一七）には木村匡（台湾商工銀行頭取・元総督府官僚）を会長として崇敬会を組織し、毎年孔子誕生日（旧暦八月二七日）に市内の保安宮等に於て釈奠を行なっている様に、[80]一定の関係を有していた。

再建された台北孔子廟との関係では、足利学校から贈られた孔子像が置かれていた様である。[81]また釈奠との関係では、福島県・会津日新館にて春秋二回孔子祭が行なわれているが、演奏されている楽章は台北孔子廟の釈奠祭にて、音楽史家で、中国文化大学で教鞭をとった荘本立が作製した楽譜である。[82]

人的交流という意味では昭和一〇年（一九三五）に深く道徳によって青年教育を通じて最高道徳として孔子を最も普遍的な実践者とし、[83]人類と世界の間の倫理関係を通じて道徳教育の実践を目指した廣池千九郎（ちくろう）によって昭和一〇年（一九三五）に開設され、廣池学園・麗澤大学の前身となった道徳科学専攻塾[84]（現、公益財団法人モラロジー道徳教育

財団　道徳科学研究所）は、同五七年（一九八二）より台北孔子廟への参拝を行なっており、台湾大学教授で中華文化復興推進委員会の常務委員で、かつ孔孟学会理事であった孔徳成[86]は昭和五二年（一九七七）一〇月、廣池学園第二代理事長で千九郎の子息の千英（ちぶさ）の招聘によって同大学を訪問し、茨城県・水戸孔子廟への視察を行なった。そして平成一三年（二〇〇一）に同大学より名誉文学博士号が授与された。また平成一八年には七九代孔子末裔である孔垂長が同校を訪れた。[87]

更に台北孔子廟と親密な関係を持った人物として、安岡正篤（まさひろ）を師と仰ぎ関西大学専門部で漢学を学んだ伊與田覺という人物がいる。安岡は幼少の頃から儒学を教えられ、日本の実情に合致した「哲人主義的民本思想」を説き、天と義を重視した。天とは道徳を身につけた者で、生まれつき人間に備った「活動」を意味した。[88]安岡は昭和一〇年（一九三五）に台北孔子廟を訪れており、[89]昭和二四年（一九四九）に師友会、昭和三二年に関西師友協会を設立した。その関西師友協会に論語によって民心の道徳的向上を目指し、安岡の指導によって成人教学研究所が設立され、所内に論語普及会が設立された。[90]同会は信愛と敬愛を重視し、最も適切なものとして『論語』を重視し、昭和四九年（一九七四）に研修所内に論語堂を建てた。その折、掲げられた孔子像図の題と賛を孔徳成が揮毫したことにより、孔子像図の除幕式に孔徳成の来日を仰いだ。[91]

これが機縁となり、翌年の昭和五〇年、第一回目の台北孔子廟釈奠参列を行ない、同五六年（一九八一）に同研修所は論語普及会として安岡の精神を受け継ぎ、同六二年より機関誌「論語之友」を発刊し、令和三年（二〇二一）に至るまで、四四回に渡って釈奠に参加している。[92]

孔徳成は渡台後、長年にわたり台北孔子廟の奉祀官を務め、民国九七年（二〇〇八）一〇月二八日、享年八九歳で

逝去した。告別式は馬英九参列の下にて行なわれ、論語普及会からは村下好伴（当時、論語普及会会長）と進藤良孝（同会理事）が、五年後の民国一〇二年に孔徳成先生五周年会、記念のシンポジウムが開催され、汪士淳著『儒者行――孔徳成先生傳』（聯經出版社）が発行された。尚、シンポジウムの成果は民国一〇四年（二〇一五）に『孔徳成先生記念論文集』（台湾中央研究院文哲研究所）として出版された[93]。式典には目黒泰禪（現、論語普及会会長）が参列した。廣池学園からは千九郎の曾孫で第四代理事長・廣池幹堂（もとたか）夫妻ら七人が参列した[94]。また、没後一〇年を記念して民国一〇八年（二〇一九）一月十九日に孔徳成生誕一〇〇年を記念して行なわれた「孔徳成先生百年記念会」には、目黒、伊與田覺（故人・同会学監）の娘の伊與田惠子ら合計七名が参列した[95]。そうした論語普及会との交流が受け入れられたのは、台湾の公教育（高級中学―日本の高等学校にあたる）に於て、『論語』の学習が行なわれていることが、その背後に存在したこと[96]も、その一因と推定される。

廣池学園及び論語普及会の関係は以上であるが、明治一三年（一八八〇）に創設された斯文会が、平成二年（一九九〇）に湯島聖堂創二百年記念を挙行した。その際孔徳成が招聘され「孔子の生涯と思想」の記念講演を行っており[97]、台北孔子廟及び孔氏家が存在することによって、日台間での交流が行なわれた。その背景として台湾での中華文化復興運動、日本での廣池千九郎、安岡の後を受けた論語普及会が基本的に儒教を道徳思想と解していること、及び孔氏家としての道統の継承にその正統性を求めていること、と考えられる。

学術活動としては孔子生誕二五六〇年を記念して、民国九九年（二〇一〇）三月に台北市政府によって、大陸、日本、韓国、シンガポール等の研究者を招いて「世界の孔子廟と祭祀式国際シンポジウム」が開催されたが[98]、台湾の孔子廟と日本人研究者との関係を付言しておくと、木南卓一（帝塚山大学名誉教授）が関西師友協会と共に昭和五四年

（一九七九）に台北孔子廟を訪れ、同廟釈奠についての論考を著している。[99]

台南孔子廟との関係では、台湾孔子廟の研究者であった寺田剛（亜細亜大学教授）が、参列者選考委員長の台南市長や国立成功大学の招きによって、民国六九年（一九八〇年）に夫人と共に、釈奠に参列している。[100]

近世・明末に鄭成功によって台湾最古の台南孔子廟が建廟され、それが台湾における本格的な儒教伝播の契機及び展開の礎となったことによって知られる様に、[101]蔣介石の渡台以降の儒教、特に三民主義を倫理、民主、科学としての用語でとらえ、創建臺北市孔子廟明倫堂記に「孔子は人倫の至りと爲す。道を修め教えを立て、萬世の師衷と爲す（孔子爲人倫之至。修道立教、爲萬世師衷）」とある様に、儒教を倫理としてのあり方を研究することは台北孔子廟の歩み、あり方を通じての儒教の解明につながるもの、と考えられる。[102]

従って、儒教を特定の民族、もしくは地域内で変容した民族宗教とする考え方があるが、[103]現在の台湾に於ては儒教は宗教とされておらず、[104]本稿に於ては立ち入らないことにしたい。

本稿脱稿後、台湾の孔子廟と日本との関係について、水口拓寿氏が論考を発表されていることを知った。一部重複する個所もあるが、[105]筆者なりに論述した次第である。

〔付　記〕（台湾及び台北の表記は複数存在するため、個々の表記に拠った）

本稿作成に当たり、水口拓寿・菅野敦志両氏の著書・論考に教えられることが多くありましたこと、また、台北孔子廟の調査、資料蒐集におきまして、ご配慮いただきました方々及び各種機関に対しまして、謝意を表します。

注

(1) 吾妻重二氏は東アジアにおける文化としての儒教のあり方を論じている（「東アジア儒教としての文化交渉」〔『現代思想』第四二巻四号　二〇〇四年〕）

(2) 澤井啓一「土着化する儒教と日本」（注1と同じ）

(3) 黄進興著　林雅清訳「伝統中国における孔子廟祭祀とその宗教性」（吾妻重二・二階堂善弘編『東アジアの儀礼と宗教』〔松雄堂出版　二〇〇八年〕）

(4) 範小平著『中国孔廟』（四川文化出版社　二〇〇四年）中国各地現存代表孔廟一覧表

(5) 寺田剛著『臺灣の孔子廟の研究』（野人会　一九八五年）總説

(6) 葉倫會編著『台北孔廟文化之美』（乗倫會出版　民国九一年〔二〇〇二〕）三　台湾的孔廟。尚、前掲　注（5）では、二四廟、廃廟を含めると二八廟としている。

(7) 前掲　範小平著『中国孔廟』中国各地現存代表孔廟一覧表

(8) 陳昭英著　松原舞訳『台湾儒学――起源、発展とその変転』（風響社　二〇一六年）

(9) 水口拓寿訳『聖之時――台北孔子廟の変遷と伝承』（台北市孔子廟管理委員会　民国一〇三年〔二〇一四〕）国定文化遺産の保存　六三ページ（以下、水口拓寿訳『聖之時』と表記）

(10) 碑文及び訓読は、前掲寺田『在台湾孔子廟碑文集成』を基本として行なった。

(11) 同碑に「臺北聖廟の建起を綜観するに民国紀元前三十三年より今まで時を閲すること、百載に近し（綜観臺北聖廟之建起、自民國紀元前三十三年迄今、閲時近百載）」とある。

(12) 同碑に「臺湾省は台北府を以て省会となしてより後、城を建て餘欵と剰材を用て剏めて文廟を建つ。光緒壬午の歳、款を募り、修を継いで規制始めて具はる」（臺湾省、自以台北府爲省會後、用建城餘款剰材。剏建文廟、光緒壬午歳、募款継修。規制始具）として光緒八年までを一期としていることが知られる。その後、民国二八年までの第二期については紙数の関係上、省略。

(13) 藤島亥治郎著『台灣的建築』（台原出版社　民国八二年〔一九九三〕）に、儒教建築として図1　の孔子廟図が掲載されている。尚、図については紙数の関係上、省略。

(14) 康有為の孔子観については、島田虔次著『中国思想史の研究』（京都大学学術出版会　二〇〇二年）辛亥革命期の孔子問題　参照。

(15) 子安宣邦著『アジアはどう語られてきたか――近代日本のオリエンタリズム――』（桑原書店　二〇〇三年）Ⅷ　康有為と孔子教国教化

(16) 太田出「閲聖帝国「顕聖」考――清朝と英雄神の関係をめぐって――」（『人文論集』第三七巻第一号　二〇〇一年）

(17) 又吉盛清著『台湾　近い昔の旅〈台北編〉』（凱風社　一九九六年）所載の地図に拠る。

(18) 前掲　寺田著『臺灣の孔子廟の研究』第二編　一、台北市孔子廟　に日本軍によって台北孔子廟（旧廟）が廃された後、廟は日語学校としても使用され、校内に五坪程の小堂として建てられ、孔子神位を新刻したことが見えており、その時の神像と考えられる。

(19) 中島隆博「儒学復興」（光田剛編著『現代中国入門』（筑摩書房　二〇一七年）

(20) 以下の記述は、前掲寺田著『臺灣の孔子廟の研究』、水口拓寿訳『聖之時』乙、台北孔子廟の儀礼空間、及び平成二二年、平成三〇年一二月の筆者による調査によって記述した。

(21) 李乾朗著『台北市孔廟』は総面積五二〇〇坪としているがこれは廟の東側を除いて回廊部があり、これを含んでの面積と考えられる。広義にてはその様にも受け止められるが、筆者は廟自体として考えているため、約四二〇〇坪として論述したい。尚、台北市孔廟管理委員会編印『台北市孔廟簡介』「民国七九年・一九九〇年」は四一六五坪としている。

(22) 以下の記述は、前掲の文献によりつつ、筆者が平成三〇年に行った調査結果によって記述した。

(23) 筆者の平成二二年の調査時に於て命名されていなかったので、平成三〇年までの間に命名された、と考えられる。以下の命名についても同じである。

(24) 孔子廟のはじまりは、孔子の亡くなった紀元前四七九年の翌年、魯の哀公が孔子の旧居跡に遺品を置いて、遺構としたのがはじまりである（中野江漢著『北京繁盛記』東方書店　一九九三年）孔子廟　一二五ページ。

(25) 林嘉言著『中国近代政治と儒教文化』（東方書店　一九九七年）四、孔子に対する再評価　第五章　結語　一七五ページ

(26) 騏驎については、平成三〇年（二〇一八）の調査時の鄭勝吉氏（文化史跡與伝統建築研究県覧、講学著）のご教授による。孔子生誕の折の龍の出現については、加地伸行編者『孔子画伝』（集英社　一九九一年）一六ページ～一九ページ　参

照。

(27) 平成二一年（二〇〇九）の調査時における元故宮博物院儀務道覧會任小組長・読書會長・李定山氏のご教授による。尚、台北市孔廟の麒麟図については、李乾朗著『台北市孔廟』（同管理委員会　民国八五年〔一九九六〕）一四ページ～一五ページの記載を参照。

(28) 『礼記』曲礼上篇に「行けば、朱鳥を前にして玄武を後にし、青龍を左にして白虎を右にし、招搖上にあり（行、前朱鳥面後玄武、左青龍右白虎、招搖在上）」とある。

(29) 前掲、寺田著『臺灣の孔子廟の研究』第二編　各廟概説　一、臺北孔子廟　七〇ページ

(30) 陳維英については、前掲水口拓寿訳『聖之時』二二〇ページ～二二四ページ、参照。

(31) 馬場春吉著『孔子聖蹟誌』（大東文化協会　一九三二年）第二節　廟制㈠　大成殿

(32) 前掲　寺田著『台湾の孔子廟の研究』第二編　一、台北孔子廟　殿宇の建築　に「以前は孔子の聖像があった。足利学校から贈られたという」とあり知ることができる。

(33) 傳朝卿・廖麗君著『全台首學台南市孔子廟』（台湾建築與文化資産出版社　民国八九年〔二〇〇〇〕）全台首学台南孔子廟建築同覧　東西部

(34) 李乾朗主編『臺北孔廟交趾陶之奠』（台北孔廟管理委員会　民国九九年〔二〇一〇〕）

(35) 若林正丈著『台湾の政治――中華民国台湾化の戦後史』（東大出版会　二〇〇八年）序章　現代台湾政治への視座1　一ページ

(36) 野村浩一著『蔣介石と毛沢東――世界戦争のなかの革命』（岩波書店　一九九七年）第二章　南京国民生活と蔣介石　三五ページ

(37) 宮原佳昭「清末の学校教育における経書学習」（古恒光一編『アジア教育史学の開拓』〔アジア教育史学会　二〇一二年〕）

(38) 桑原隲蔵「支那の国教問題」（『桑原隲蔵全集』第一巻　岩波書店　一九六八年）

(39) 有田和夫「民国初期の孔子論の性格」（『東洋大学中国学会報』第一〇号　二〇〇四年）

(40) 磯部榮一編集・発行『釈奠』（東西研究会　一九三五年）一六、清代の釈奠

(41) 肖啓明「民国初期における孔教会の活動」（『東アジア文化研究』第四号　一九九七年）

(42) 丸山松幸著『五四運動――中国革命の黎命――』(紀伊国屋書店　一九八一年)
(43) 田中比呂志著『袁世凱』(山川出版社　二〇一五年)七八ページ、及び前掲　磯村編集・発行『釈奠』　一七、民国釈奠の復活
(44) 宮原佳昭「袁世凱政治期の学校教育における「尊孔」と「読経」」(『東洋史研究』第七六巻一号　二〇一七年)
(45) 黄進興著・中純夫訳『孔子廟と儒教――学術と信仰』(東方書店　二〇二〇年)第四章　聖賢と聖徒――儒教従祀制とキリスト教列聖制の比較　二五八ページ
(46) 魯迅は民国一四年(一九二五)一一月二七日の『猛進』(週刊)第三九号に「民国十四年の「経書を読め」論」として反駁を加えている(相浦果訳『魯迅全集』第四巻〔岩波書店　一九八四年〕)
(47) 澤村幸夫著『支那民間の神々』(象山閣　一九四一年)祀孔――孔子祭　四四ページ～四五ページ
(48) 内容については、戴季陶著・中山志郎訳『孫文主義の哲学的基礎』(生活社　一九三四年)を参照。尚、儒教と三民主義との関係については我国に於ても関心が持たれ、注記以外のものでは、梅嵩南著『三民主義と階級闘争』(日本評論社　一九二九年)塩谷温「孔子と三民主義」(『斯文』第一九編一〇號、一九三八年)、高橋勇次著『孫文』(日本評論社　一九三八年)、島田虎次「孫文の儒教宣揚の動機論をめぐって」(『山根幸夫教授退休記念――明代史論叢(下)』汲古書院　一九九〇年)等がある。
(49) 河田悌一「孫文の文明観そして儒教」(『関西大学東西学術研究所紀要』三二号　一九九九年)等がある。
(50) 蔣介石著・波多野乾一訳『中国の命運』(日本評論社　一九四六年)第一章　中華民族の成長と発達　一五ページ
(51) 安藤彦太郎「孫文の思想と継承」(『思想』三九六号　一九五七年)
(52) その際、孫文は開校の精神を「陸軍軍官学校開校演説」(伊地智善継・山口一郎監修『孫文選集』第二巻〔社会思想社一九八七年〕)所収、として述べている。
(53) 前掲　野村浩一著『蔣介石と毛沢東』第二章　南京国民政府と蔣介石　六〇ページ
(54) 同右、野村浩一著書　第一〇章　第二次大戦期の中国戦場　三一四ページ
(55) 孔徳懋著・杉山市平訳『孔子――その子孫が語る孔府の話』(北京外文出版社　一九八三年)五、孔徳成のこと
(56) 菅原敦志著『台湾の国家と文化――「脱日化」「中国化」「本土化」』(勁草書房　二〇一一年)第二章　第一節　一九五〇年代の台湾の中国化――「改造」と「中央化」の影響を中心に　一五二ページ～一五三ページ

(57) 菅野敦志「台湾から見た文化大革命」(『中国――社会と文化』第三二号　二〇一七年)。尚、高雄孔子廟については高雄市文献委員会編『認識孔子、孔廟與祭祀』(同会発行　民国九七年〔二〇〇八〕)五　高雄孔子廟　(㊀現今高雄市孔子廟　参照。

(58) 唐暁文「孔子は「全人民の教育家」か」(中国通信社　東方書店出版部編『孔子批判――付・魯迅の孔孟批判抄録』(東方書店　一九七四年)。尚、孔徳成は「人間はすべて平等であり、教育を受ける受けないはその人の姿勢であって、人間の種類によって左右されるものではない」と解し、中国教育史上に新しい面を開いたものとしている(淡島成高編『孔子直系七十七代　孔徳成が説く孔子の思想』(麗澤大学出版会　二〇一六年)「孔子の生涯と思想」一九ページ　と解している。

(59) 前掲　水口拓寿訳『聖之時』　再健――民間における孔子崇拝の象徴　二一ページ

(60) 詳細については、同右『聖之時』　郷土の賢人を初めて孔子廟に祭る――陳維英先生　二〇五ページ～二二四ページ　参照。

(61) 平成三〇年(二〇一八年)の筆者の台北孔子廟での調査でのご教授(蘇美齢〔臺北孔子廟管理委員・約聘企劃師〕)による。

(62) 菅野敦志「中華文化復興にみる戦後台湾の国民的文化政策」(『中国学研究月報』五九巻五号　二〇〇五年)

(63) 前掲　菅野敦志著『台湾の国家と文化』第二章　第一節　4、文芸統制機関と文芸「改造」　一六六ページ

(64) 若林正丈著『蔣経国と李登輝――「大陸国家」からの離陸』(岩波書店　一九九七年)第四章　表舞台へ

(65) 前掲　菅野敦志著『台湾の国家と文化』　第四章　蔣経国の「本土化」政策と文化政策の変容(一九七七－一九八七)二九四ページ～三〇三ページ

(66) 蔣介石著『わが父を語る――偉大なる一平凡人の愛と不屈の歳月』(新人物往来社　一九七五年)

(67) 段瑞聡著『蔣介石と新生活運動』(慶應義塾大学出版会　二〇〇六年)序章　蔣介石研究の射程、及び第一章　新生活運動の背景――思想的側面を中心に――

(68) 具体的な内容については、前掲　菅野敦志著『台湾の国家と文化』第三章　第一節　中華文化復興運動にみる国民党文化政策の特徴と連続性　二五八ページ～二六三ページ　参照

(69) 前掲　菅野敦志「台湾からみた文化大革命――中華文化復興運動を中心に――」

(70) 水口拓寿「孔子の祭りに牛・山羊・豚は不要か?――中華文化復興運動期の台湾における「礼楽改革」事業の一斑――」(伊東貴之編『「心身／身心」と環境の哲学――東アジアの伝統思想を媒介に考える』(汲古書院　二〇一六年)

(71) 李登輝著『台湾の主張』(PHP研究所　一九九九年)第一章　私の思想遍歴　五〇ページ、第八章　二十一世紀の台湾

一九六ページ、及び二〇二ページ

(72) 加藤英明著『日本と台湾――なぜ、両国は運命共同体なのか』（祥伝社　二〇一三年）第四章　馬英九政権の行方

(73) 前掲　菅野敦志著『台湾の国家と文化』　第四章　第二節　6、一九八七年「加強文化建設方案」制定とその後　三六六ページ～三六七ページ

(74) 前掲　李登輝著『新・台湾の主張』（ＰＨＰ研究所　二〇一五年）日本の精神に学ぶ　四四ページ～四五ページ

(75) 李登輝著『「武士道」解題』（小学館　二〇〇三年）第二部　第二章　武士道の淵源　一二〇ページ

(76) 崔淑芬著『来日中国著名人の足跡探訪――徐福、楊貴妃から汪兆銘、蔣介石、周恩来まで――』（中国書店　二〇〇四年）第二編　近現代以降　蔣介石と陸軍士官学校、及び前掲　段瑞聡著『蔣介石と新生活運動』補章　蔣介石の対日認識――新生活運動の背景を例に

(77) 春季祭礼（釈奠）は民国一〇五年（二〇一六）に廃止され、現在は行なわれていない。これは同年、民進党の蔡英文が総統に就任しており、同党の儒教政策によるもの、と考えられる。

(78) 前掲　水口拓寿訳『聖之時』　孔子廟の儀礼空間　(3)超越した空間　六〇ページ

(79) 台湾における漢文教育については、川邉雄大「外地の「漢文」教科書について――台湾を例として――」（牧角悦子・町泉寿郎編著『講座　近代日本と漢学　第四巻　漢学と学芸』〔戎光祥出版　二〇一〇年〕）を参照。

(80) 前掲　寺田剛著『臺灣の孔子廟の研究』　第二編　各廟概説　一、台北孔子廟、及び、前掲　黄得時編著『臺湾的孔子廟』第二章　台湾各地之孔子廟　2、台北市孔子廟

(81) 同右、寺田剛著『台北孔子廟の研究』

(82) 高橋貞夫著『あいず祭り歳時記』（歴史春秋出版　二〇〇二年）会津藩校日新館孔子祭

(83) 金生紘「最高道徳に従って――人間の道徳的向上の努力に関する廣池千九郎博士の考えを理解する」（岩佐信道・北川治男監修『廣池千九郎の思想と業績　モロラジー世界の評価』〔モロラジー研究所　二〇一一年〕）

(84) 井出元「儒教と廣池千九郎の道徳思想」（『モロラジー研究』八号　一九八五年）

(85) 孔徳成著・淡島成高編訳『孔子直系第七十七代　孔徳成が説く孔子の思想』（麗澤大学出版会　二〇一六年）廣池幹堂　刊行に寄せて（以下、孔徳成著・淡島成高訳『孔徳成が説く孔子の思想』）

(86) 菅野敦志「一九五〇年代初期台湾の中国化――「改造」と「中央化」の影響を中心に」（『日本台湾学会報』第一〇号　二〇〇八年）
(87) 廣池千英編集・発行『孔徳成先生来日記念写真帖』（財団法人　道徳科学研究所　一九五八年）
(88) 川井良浩著『安岡正篤の研究』（明窓出版　二〇〇六年）第一章　大正デモクラシー期における安岡正篤の民本主義　一「哲人主義的民本思想」及び二　安岡正篤の民本主義（一）「天子論及官吏論」参照。
(89) 中島隆博「儒教復興」（米田剛編『現代中国入門』〔筑摩書房　二〇一七年〕）
(90) 「論語の友（ママ）」創刊号（財団法人　成人数学研究所　一九八七年）
(91) 伊與田覺「孔徳成先生を偲ぶ」（「論語之友」二〇三号　二〇〇八年）
(92) 詳細は「論語之友」第三二六号（論語普及会　二〇一九年）
(93) 秦兆雄「人類学からみた中国の儒教復興――東アジアへの展望」（『孫文研究』六一号　二〇一七年）
(94) 孔徳成著・淡島成高訳『孔徳成が説く孔子の思想』「孔徳成略歴およびモロラジー研究所・廣池学園との交誼の軌跡」を参照。
(95) 目黒泰禪氏のご教授による。
(96) 荒木雪葉『台湾における論語教育―高級中学教科書『中国文化基本教材』（国立編譯館版）研究（1）」（『地域健康文化学論輯』七号　地域健康文化学会　二〇一二年）
(97) 「斯文会々報」第二二号（斯文会　一九九〇年）
(98) 内容については、前掲、水口拓寿訳『聖之時』四、近き者喜びて遠き者来たる・儒学の交流　二四一ページ～二四六ページ。
(99) 木南卓一「台北孔子廟釋奠參觀の記――付、台湾管見」（『帝塚山大学論集』二七号　一九八〇年）
(100) 寺田剛「台南孔子廟の祭典に参列して」（『日本』第三一巻八号　一九八三年）
(101) 前掲、陳昭英著・松原舞訳『台湾儒学』第一章　台湾における儒学の移植と発展――鄭氏政権時代から日本統治時代にかけて
(102) 前掲　斎藤道彦「台湾における蔣介石の三民主義」
(103) 石森大知「日常生活のなかの宗教――超自然的存在とのコミュニケーション」（大屋幸徳・内藤暁子・石森大知編著『文

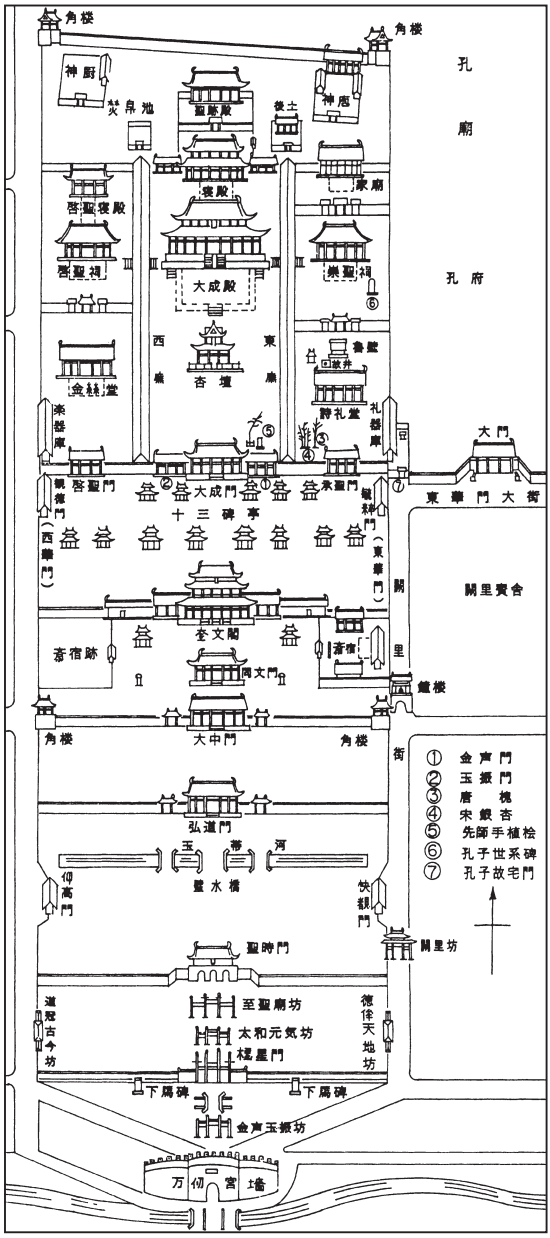
化とコミュニケーション』（北樹出版　二〇一六年）

(104) 前掲　黄得時編著『臺灣的孔子廟』第三章　台灣各地的孔子廟　には、「本来孔子的學説和主張、不是宗教。孔子也不是教主、也不是神明、那裏可以用奉祀一般神明的方法來拜拜孔子呢？這種不合規格的孔子廟、最好不准設立、以保持孔子廟的純粋性。甚至有的地方、以三教一體為號召、以「儒、道、釋」的神像、擺在同一神桌上任人膜拜、更為可笑」とあり、平成三〇年（二〇一八）の筆者による台北孔子廟での調査に於ても、蔣介石が渡台時に仏教、道教、回教、キリスト教、天主教（カソリック）の五者を宗教とし、儒教は宗教ではない、ということであった。中華文化復興運動のあり方からすれば、肯首できる見解であろう、と思われる。

台湾孔子廟研究者である黄進興はその著、中純夫訳『孔子廟と儒教――芸術と信仰――』（東方書店　二〇二〇年）に於て、儒教は孔子祭祀・天の祭祀・祖先祭祀等の様に宗教としての要素を内包しているが、今日の我々の視界に映る儒教は脱宗教化した儒家にすぎない（同書　第二章　宗教としての儒教――比較宗教の初歩的試み）として、宗教ではない、としている。

(105) 筆者はかつて台南孔子廟について論述したことがある（「台南孔子廟をめぐって――台湾における二様の儒教のあり方について」『関西大学中国文学会紀要』第一七号　一九九六年）。その際台湾に於ては孔子祭祀には二様のもの、つまり為政者によるものと、三教混淆的な一種の宗教と受けとめられるもの、という指摘をした（前注の黄得時の編著書の引用文、参照）。その後、孔氏家を通じての（儒教のあり様の研究に当って、大陸浙江省・衢州孔氏南宗家廟と同様に台北孔子廟が重要な意味を持っているのではないか、という考えに至ったため（拙稿「浙江・衢州孔氏南宗家廟について――曲阜孔子廟との関連・比較に於ての考察――」（『關西大學中國文學會紀要』第三一號　二〇一〇年）、平成三〇年台北孔子廟の調査後の翌年三月に本稿の草稿の完成を見た。本稿脱稿後、『東方宗教』一三四号（二〇二一年）六月の論文目録に於て、水口拓寿氏が論考「台湾における「孔子廟と日本」の百二十年：統治者たちの視点をたどって」（『宗教学論集』三七号〔二〇二一年〕）を発表していることを知った。同論考に於て台北孔子廟の位置づけ（中華文化復興運動）、台北孔子廟と廣池千九郎、論語普及会等重複する記述があるが、筆者の調査・研究に基づくものであること、書き添えておきたく思う。尚、廣池学園との関係は小林正昭氏（麗澤大学出身、元中国旅行社）、関西大学総合図書館にて、論語普及会との関係は筆者は同会会員であり、同会会長・目黒泰禪氏を通じて資料蒐集を行なった。

《巻末参考付図》曲阜孔子廟図



孔徳懋口述・柯蘭筆記　相川勝衛訳『孔家秘話―孔子七十七代の子孫が語る―』（大修館書店　1989年）より。但し、筆者にて一部修正。